當流茶之湯流傳集　二

大廣客入之次第
同会席之時上座中座下座座付の図
同中立して台子手前の時客座付之図
同台子手前点之図踏手前
台子真の手前の図
台子順様子之図
長板之図
及台子此図

當流茶之湯流傳集巻之二

鎖の間の習

一 天井之高サ七尺八寸　天井板縁ごとし枚数六枚也

一 床の天井之高サ七尺三寸六分

一 床脇のたなしがけ地板居る高サ二尺八寸

一 床おとしがけふかげけし思ふものゝ上へ寄る

一 天かぎを指深し七分寸法畫ニ有

一 自在ハ天井之高サたとへバ七尺五寸あれバ炉縁より三尺計すミ置く六尺三寸と定む。もし自在の上げ下げ自由なるを

一 鎖(クサリ)ハ其長さを三尺計又ハ四尺も上ニ小かぎ下ニ小かぎ有り上にし計尺ほど垂らしても下にし又計尺程たまらを極よきなりぬりもし茶の時上げ下げ

と自由よきなるなり

一 自在ニかける釜の大キ一概に形(カタチ)に極まらずし只大なる釜ハ好みつき出さかる故形の小(コ)ぶりなる釜を好(ヤウ)とするを

一 炉の深サハ椽口(ハ)より焼(ウヅ)口より炉縁一寸ほとひようけ釜のそこ迄の計す八分よするなり

一 世に自在鎖(クサリ)の時とさ法を知る人稀なるはやまると知べし手釣ハ上(ア)げ下(サ)げを自由にすべき為の自在鎖なれバ其法をしらバ自由なるぞ宜し殊べし又異の大事を不知人の読(コトバ)なるべし

一 其法まらける釜ハ其の所へ異の所なる串を

釜ハ自在鎖の釜ハ炭をとゞかざる所を常々心を
くしも又然べし

自在鎖釜之扱

一つるハいろくの形(カタ)に取て扱ふ様にすハりかんを
付合(ツキアハセ)かんこうくとかきこして釜の口を合(アハセ)たるがよし
又入違(イレチカヒ)を深(フカ)くしるをとるもしとゞきさうり炭
をするハらをとるかんをとりさて手ハ和し

四畳半切自在の炭手前

一炭斗常の如く持出て外(ソト)の方を置き
香合一ツ取りて紙を開(ア)け
炭汁(スミトリ)をとりての位ニ持出かざし
其の内炉縁
一寸ほど右ニ香合
かゝり出る輪を取
お炭斗を右炉
ぎハへよりたの
末しくぎの尾を手に平(ヒラ)ニ 炭をおろし持(モチ)とく持(サイ)しくぎを
立て持左の膝(ヒザ)に炭斗を寄かへの右にこしげる

よく茶を手おろし上く右れをとくらんに家(カコ)
し又先をくらんにおゆし中をおし揉う
帛を取出し茶此蓋をおゆ
羽箒を取蓋此上掃ひ如斯に
釜諸(ホトコロ)にて紙取
紙取出し三ツ
三ツとて釜左へ八
つるを上下持右
しらんを持て
くぎと左の鐶持し向へすべり紙のとき釜左へ
手に持右し茶を禄(ロク)に置しいすまりずゝせ参

肩下まへうり付て右の方のくらんを掛し左ハつる
しをりし如肩くべよ立くけれく
板居くり炉に向自立を取
くぎをやきおし丸れ下
よ座へ二つき
釜と羽箒と
取炉のふちも
き入レ付よ添
と出てゐる
板大角を取く下(シタ)火(ヒ)出し羽箒此ねに出る掃出
鍋を取如肩炉ぎハへ炭戻を出し又出漏掃く

一鎖の炭とりおろしよりハかゝる事なしつぐと
いくハ小くぎにかゝると云けれども炭付を
手続ほどよく取なし羽箒をかける後(ノチ)羽箒をかけ
も不自由を同事也一遍はらひに直也羽箒香
の時又一遍はらふ事也とかく八歩ちがひにする
一亭主方にて八広(ヒロ)き座敷由通(カヨヒ)をは小姓の小坊
主の役(ヤク)なり手前にて此通(カヨヒ)する事ハ無之候り
引物并何にても一色か二色程ハ持出る方も申
外に持出る事をいみ也

小書院中立
一会席(クワイセキ)済(スミ)菓子出し先客入向ひ名残(ナコリ)の
縁側をひらき外の荘ハあけ置也障子(シヤウジ)を
明(アケ)縁(エン)にある押てあく庭の風景を見る縁(エン)
なれども多くハたゞこゝ迄にしてこまかに
見ずらく住む心よく書院よりかける喚(ハン)鐘(シヤウ)を
せきを聞(キ)とよりて手水に立べし縁先に
手水鉢なくバ遣(ツカフ)べし庭中(ナカ)などへハ出べからず
外へ出てなりとも遣べし捨てならぬ物なりとて
ハよくよくするがよし後(ギ)など座敷に入荘物拝見ハ
会席の荘をよくよく見るべし

と同事し建水柄杓を湯を入すゝぎ又湯を入水
一つハ半くみ入茶筅とりけ茶筅改め了る
上手ハ建水へ遣し右にて茶碗ふき湯よく
茶巾入て二盃茶筅入茶碗を水指のまへ遣し
茶入をも其をひやゝ元水一柄杓入釜の蓋を
柄杓蓋置にかけ居ありて水指の蓋しめ柄杓
取く柄へ上はかまを同じ事也其時また茶入を置
一旦時宜を致す時ハ二客共に同じく致すへき
亭主も水指遣し茶入を帛紗にてふきふくさ
茶碗を置も亭主へハ見えしやうにふり建水
のきハへおき奥のくふ茶杓を揃へ縁一つハに

下を去そ炭のつくるをも柄杓を取ず左に切し
建水へ入又往時にゝ止く茶入茶碗ふく茶巾へ添
一小板盆に置く柄を二本柄に下に柄に押立しる
らんの付足しなり柄を
一下だなをくすゝみたなを上にあハひやしたんのつる
に付たるたなを
一上下の柄をとりて二本にしてと上の北をなを
をすりくへに切たるを有り
一上の柄にあり二方にあらんを付しるを
一上下の柄ををく先く四方の角の入たるを
右何も小板盆の何いしいといひかたらへかし

一盆振おら習事ありおよひ時より文茶入の包
不ふまお作配（サリハイ）の内書たる所の如し小手院
乙を立置をこと文を作り無に大概ハ立一段
ハせずして吉し
一唐茶碗を掛か小台子の前に盃台を用此
點る文と行り文茶道に點させする文を為
首尾に位べし夜し水菓（名）子（こ）じと文ハ干菓
子あるとある常此なるまひにひらきさる文
空き半れ座敷し切様法のごとくして数寄や
圍（カコヒノ）ありけたるとあるに文数寄屋の心にして
とりとする右之作法ハ古此法式也東山殿

の時より徳謙（ゴテツカフ）の茶入ハ又此飾（アイレライ）し
又右式の大手院のかくもちとちがひある

四畳半
逆勝手の嬉

一此まお六門に入て左の方に床の付るハ本道
勝手なるを知ところにて数寄屋にあらさるとて荘り床し

新茶棗(ナツメ)之道ハあまたある古き茶入ハ古蒔絵(マキエ)

茶の中ハおもしろきちり之帛しゆひある物也

又新茶入とも物数寄よ

蒔絵(マキエ)なとするハ又ハ唐物(カラモノ)の

中次なとあるゆへ手をかけしものなり

一 はたの茶巾(チャキン)茶杓ひとつなりてこれハおこりなり

風呂茶之湯の事

一 四月朔日ハ炉をふさき風呂を出し八月晦日ニ

炉をひらき初(ハツ)風炉の茶湯をいたす八月晦

日をハ風炉の名残とて炉しまひの茶湯

をする事有り是ハ其かはりなく

一 風呂ハ茶湯(ナラ)風炉をいまてする又一通(トヲリ)かはり

しや湯へする事も然れども大焼よりきた

銅(カラカネ)の類(ルイ)

かはりたるハ茶碗(セトカワン)にハかはりし一風炉にすへる

灰(ハイ)を篩(セン)一とするハ是故一位にハ無(ム)理(リ)のよき灰ハ

二ところにかはる也らかす風炉の灰炉の灰の如く

する人有り大きに相ちがへある也口伝

床

刀掛

二枚腰障子

大目

勝手

客入之次第

一 風炉ハ客設多ハ朝数寄之無尽ニ昼数寄を行ふ
前尾次第之昼数寄ニ来ハ待合へ供まわりを待せ
一客ハ内ニ路地ニ水たぶくと打きに出来ば亭主
き上門(アケ)をとるまと見ばくくりしき待内ニ亭主お
ろくなびかふおるゝすま客衆ふくま入し此図ハ路
と作しの二枚障子(セウジ)申へくまてをおとくすハ
客ニ水を遣ひ縁(エン)ニより刀かけのきハへ供刀
とあきて物指をぬきとあるこそ掛障子をそろり
と路内へ入つし床ニ向ひ花をみる大月へ入ニ面
よハこのかこ法を居内へそろりとずるぢこ子細ハ

ぬるハぬくさたるにしと会も安まき申へきり大目へ入
て棚(タナ)の風炉を見て立べし之入掛(イリカケ)の下へ手すると
ふ居もりうりたとの居様前にりり然時に亭主
あくつあ山のるかし あつらくるて
料理を一通り組立まりて下をの
通(カヨヒ)する文を行て文小作のまかり付
さとる事をとる会席此飯(チョク)し椀
おまに記する通(トヲリ)ありと酒一ふ前より
菓子(サウ)青あくてみをぬくべくを掛出に法する

ある〻

風炉之図

あしきなりと云〇之り新ハ今ハ多分に遣べし
こゝろもちろんのなるは慮外(リヨクワイ)なり
一 亭主方にハ二枚障子の色をもひし色紙まで風
炉先窓を障子をひらし外の方にハいよいよすゞ
しき水とすゞしくなるなり
一 台子の飾にて八出して後戸をあけると見ゆるなり
一 風炉ハ小板向ふへ八歩 勝手ハ畳(タヽミ)目九めに置
一 同大板の時ハ向ふへ八歩 勝手の畳目十五めに置
此時ハ蓋置を大板ノ外(ソト)へ出し置が習なり

風炉にて台點の図

一 水指ハ右に寄せ奥へ寄て 飾(カザリ)たてゝも出へ水盃と
指て台子の飾ゆゑに右 居住居(イスイ)するなり前の
如く何も綴に置て跡茶碗九出し 大概ハ
右に置茶入右へ寄 出帛 ぬぐ拂 袋さばき
して杓を取うけ茶入巾ひ出 茶碗巾ひうけ

茶筌及柄杓をくべ帛紗小板此ちりと巾ひ左へ
帛紗茶巾及奥へ入おつこ茶入の蓋を置ほど附ス
扱小板一まいよ茶碗引出し是迄手前まで

ちまと右にし柄杓を小板とくべとの方におゝい小板一まいに
置帛紗と釜の蓋を柄杓に置ひやくれ湯一ひやく
入釜よかゝる時かけ板を末のひやくさし置柄杓

さし組茶筌を湯に入てつゝ上はこりをふんで
出し置茶巾及きぼり如常にしすぐ茶碗及上
湯をすくり巾ひとト置茶巾をくめ茶入の蓋

のとへ付げ茶杓及茶入及棚にそよ茶を入
茶入之蓋ハ小板のちびきに置茶杓ハ茶碗に置
茶入の口巾ひ蓋して出し遣し茶をひろ

大廣間

一 付書院之荘餝
銅鑼
抱
巻物
下軸金
三尺料紙
硯箱
中央之卓

二方床之荘
違棚之荘之圖
大食籠
塵壷

一 縁がは之案

向ニ菓子屏風をまへくおく如此案

大書院客入之次第

一 式台より入 長廊下を往 書院へ入 先上段
より床へ向ひかけ物より見て香炉を見
卓下の花を見る 卓をよるより手を付べし
扨付書院へ向ひ文具より軸盆を見硯料紙ト
見所の次の間へ往上より下の掛物を見て立て付
掛物ハ先して扇子ぬき置べし 扨縁がはへ出て
掛物をぬき菓子の間へ往上此案より[illegible]
下へ下りし立 脇掛物を指 扨次の間の二方床
の中往真中のかけ物を見て上座の方往
又かけ物を見る立花を見てそばへ居寄て

水ぎハ生ある也又よく下座の方のうけ物
の前へ座を取べく下の立花と又もバ上座
水ぎハを前へ出る也物なりて二尺ほど三尺ほど
ハ座敷より六尺ほど去くあるがかまハず
客次第に座するが禮なり然共是非
に書院へハ通ると云時ハ通り物也去ながら座
に上る事ハなきなり下ニ座付べし客次第
御旅大座敷の作法を常にまなぶ故都人とまじ
わり故に苦しからぬ物也

一 会席の時の座付しむ人数ハ八畳の事なり九
大勢など同じ

茶入に袋掛帯結め勝天井へ上茶入巾ハ掛帯
遣し茶杓巾ハ茶入にうけ茶筌ほとくかくべし天
井と巾ハ茶巾とも茶碗と茶筌ともかくべし

帛と茶の蓋とり帛をきゝ右にしぼりて二服
よぬき出し湯二ひやく入て後よりひやくい出茶
天井へ筋違よ上て茶筌袋湯後にかけて下盆

茶巾ときぼり出茶の又湯次第ッ十引上茶巾袋湯桶
茶碗と巾ぬぐべし下盆茶巾きつめ上茶杓とり
茶入袋茶能ほどよく入茶碗にうけ茶入出座へ置し

茶の蓋袋ひやく九湯入る帛袋掛し茶碗山ス
一二服まで次の茶碗袋湯一杓たぎり入たへ掛茶の
蓋とする台又為之へに天井へ上るとき茶筌袋ばかりを

如此りと茶巾を中ひろげ茶入れ能ほどに茶筌と
入茶碗の蓋を湯を能ほどに入茶筌を如此して初めの帛
紗のとこまつ去る未だ臨由遣ハ又之への帛紗を出之中の

茶碗之縁く左右に左の茶碗之うち如く右足等を
きく下に茶筌を先の左へ入れとする右足を同し由す
ぎして右手へ上ぐ右の茶碗の右のつるを乞しあへく如く

仕立也茶入茶杓出して置事ハ如常ニ出ス
一此台子ニ長緒ニ置く茶入茶筌を水指の右ニ荘
を右の様のかと親
一此台子ハ逆逆勝手の台子之事故に呉此扱ハ皆
逆にあれハ逆勝手と云ハ右之方ニ水盈付之
一此勝手と云ハ左北方に水盈付之故に呉扱
皆此にあれハ是
一長板台子と云之ハ台子を略したる故り
台子の此にあり同し又長板ニ一の重此ありて
一及台子と云物ハ鉄茶杓にて上下ニ雲形をすうし
たる物之之を點検台子と同じく水指の蓋と

す此程よ右茶席こそ外からの事なし

一　三畳大亭主客共作法

一　二畳半共亭主客作法

一　小書院茶室二畳半切亭主客共作法

一　風炉之茶之湯亭主客共作法

一　大書院茶室菓子之茶之湯亭主客共作法

右五段の心得ハ古法此書ニ然とも世人式道
ふ疎錬の為よ梓ニ令下ス能何篇をこくらり
て見へ玉へ久敷時ハ誠有

遠藤元閑